

第三章 古代

本章では、本土の時代区分ではほぼ古墳時代ころから平安時代までを取りあげることになる。しかし、沖永良部島の場合は、これらの時代についての歴史記録はまったくなく、当代の様子は、本土との関係や南西諸島の歴史のなかで推測するしかない。

第一節 本土との交流

わが国の歴史記録（『日本書紀』など）の上に南島のことが見えるようになるのは、聖徳太子が推古天皇の摂政をつとめていた七世紀初めのことである。

すなわち、六一六年（推古天皇二十四）三月から七月にかけて掖玖人が合わせて三十人來たので、朝廷では彼らを朴井（あひい）という所に置いたが、帰還しないうちに全員死亡したという。

この記事からすると、掖玖が屋久島だと簡単に決めてしまうわけにはいかないようである。というのは、掖玖人は、この年三月に三人、五月に七人、七月に二十人と

たとの記事（『日本書紀』）がある。観貨邏国（吐火羅国とも書く）とは、トカラ諸島ではなく、今のタイ国のメコン河下流にあった一王国と考えられている。

また、大化の改新を経て、七世紀の末、六八二年（天武天皇十一）七月には、阿麻弥（あまみ）人が種子島・屋久島の人々とともに、朝廷で禄を賜わっている。これは奄美の人々が朝貢したことがわかる最初の記事となっている。さらに六九九年（文武天皇三）七月には、奄美・度感等の人が種子島・屋久島の人々とともに土地の産物を貢上して、官位を授けられ、物を賜わっている。（『続日本紀』以下同じ）ここに見える度感とは徳之島のことと考えられている。このときには沖永良部島のことは見えないが、周辺の島々の中では大きい島として徳之島が代表されていたとすれば、このとき沖永良部島からの朝貢もあつた可能性がある。

六九九年のこの記事は、前年南島に派遣された覓国使（みくにし）と関連するようである。すなわち、六九八年（文武天皇二）四月に、朝廷は文忌寸博士（ふみのみきしかせ）八人を覓国使として南島に遣わしている。その目的は、一行を国を覓める使（もと）として行政区画に

いうように三度にも分かれて来ているので、どこかに漂着した可能性が大きい。六二〇年（推古天皇二十八）八月にも、やはり掖玖人が二人伊豆島に流れ着いたとの記録がある。そこで、掖玖を屋久島だとすると、なぜに屋久島だけから次々と漂着するものが出たのかを説明することは困難である。そこで、掖玖を南島全体を指すと考えると、これらの記事のようなこともありうると思われる。南島から漂着した三十人は、衰弱がひどかったのか、流行病にでもかかっていたのか、皆死んでしまった。

おそらく、この記事と関連してのことであろう。朝廷では六二九年（舒明天皇元）四月に田部連らを掖玖に遣わしている。南島の情勢を視察させたのであろう。一行は翌年九月に帰朝しているが、その期間が一年五カ月におよんでいることからしても、掖玖は屋久島ではなく、南島とひろく解するのがよいであろう。いずれにしても、南島は七世紀以降、ようやく朝廷の視野の中にはいつてきたといえよう。

奄美大島が歴史記録に初めて見えるのは、六五七年（斉明天皇二）七月のことで、観貨邏国（あか）の男二人、女四人が海見島（あまみ）付近を漂泊したあと、筑紫（北部九州）に漂着し

加えようとの意図があつたものと思われる。また、遣唐船の航路としても南島路が注目されてきたため、その航路開発も兼ねていたとみられる。覓国使一行は翌六九九年十一月に帰ってくるが、それに先立って種子・屋久両島や奄美・徳之島から朝貢があつたのは、覓国使の成果とみてよいであろう。

奈良に都が遷つてから四年後の七一四年（和銅七）十二月には、太朝臣遠建治（おほのあそんおけち）らが南島の奄美・信覚・球美などの島人五十二人を率いて帰還している。太朝臣遠建治らがいつ南島に出発したかは明らかではないが、やはり一年半以上の行程を費したと想定すると、前年の春ごろ派遣されたのであろうか。ここに見える信覚は沖繩の石垣島、球美は同じく久米島だとすると、一行は南島をほぼ踏査したものとみられる。この記事と関連して、翌七一五年（靈龜元）の正月には、奄美・夜久・度感・信覚・球美らの人々が土地の産物を貢上している。これらの人々の中にも沖永良部島からの朝貢者がまじっていた可能性があろう。

以後、七二〇年（養老四）十一月に南島人二百三十二人が來朝し、七二七年（神龜四）十一月にも南島人百三

十二人が来朝し、それぞれ官位を授けられている。これらの記録からみると、南島からの朝貢は定期化したかにも見えるが、以後、それに類する記録がないことからすると、南島からの朝貢は一時的なものに終わったようである。

南島に使者などを派遣したことは、すでに指摘したように遣唐船の航路確保とも関連していた。特に、漂着船などへの対応に意を注いだようで、七三五年（天平七）には南島に牌はをたてさせている。航路にあたる島々の要所に、島名、船の停泊できる場所、水のある場所などを書いた札をたてさせたものようであるが、七五四年（天平勝宝六）にはそれらがすでに朽ち壊れていたのが修復させたという。この時期には、実際に南島經由の遣唐船のことが記録に見えている。すなわち、唐僧鑑真かんじん一行の乗船していた船が七五三年（天平勝宝五）十一月には阿児奈波島（沖縄島）を經由して、翌月薩摩国阿多郡秋妻あきめ屋浦やに入港しているし（「唐大和上東征伝」）、また大宰府からの報告によると、翌七五四年三月には奄美島を発した遣唐船が消息不明になったことも伝えている。沖永良部島にも海岸のどこかに牌がたてられていたのである

うが、いまではそれがどこであったかはわからない。

このように、南島は古代史に登場するのであるが、結果的には一つの行政区画を形成することはなかった。その点では、種子・屋久両島が多嶺島たねがしまという一国に準じた取り扱いをうけたのとは異なっており、朝廷との関係は、朝貢関係で保たれる程度であった。しかし、それも必ずしも長期にわたって維持されたわけではなく、八世紀の末葉以後は、その関係が不明確なものになっている。

一方、朝廷では阿麻弥人あまみを夷人雑類いじんざるいとして、いわば異種族とみなしているが、その点では南部九州に住んでいた隼人も同じ取り扱いをうけていた。